

**International Conference at the Picture Book Museum Burg Wissem, Troisdorf,  
19-21 March 2009  
Children's Books from 0 to 3: Where Literacy Begins**

**最近の日本における新しい赤ちゃん絵本の流れ**  
ー赤ちゃんのためのシュールレアリスティックナンセンス絵本ー

佐々木宏子

今回の国際会議における発表は、対象が 0-3 歳の乳幼児の本であり、言葉で表現するには限界があるため出来る限り映像を中心に Literacy/リテラシーが育まれる具体的な状況を絵本との関わりで分析・考察しました。一人の男児（平成 14 年 7 月 20 日生）の 5 ヶ月から 2 歳 7 ヶ月までの姿を丹念な映像で追い、絵本・ストーリーテリングがいかに言語獲得・コミュニケーション・人間関係調整能力のリテラシー形成と深く関わっているかを考察しました。

**言葉を獲得する前に育まねばならないこと**

**I 言葉は分からなくても昔話を聞くことができる（映像）**

赤ちゃんは、親（おとな）が語りかけてくれる昔話や絵本の読み聞かせに音声で応えたり、嬉しさの感情を全身で表現し、読み手と積極的にコミュニケーションをはかろうとします。

赤ちゃんは、昔話や絵本の読み聞かせのリズム・メロディを通して日本語の音声パターンを自然に学び始めます。

**ビデオ 1**：桃太郎の昔話を聞きながら自分も一緒に口をもごもごさせ、やがて語り手の動く口を見ながら泡を吹き続けます。（5 か月）（ここで書かれた月数は、標準的という意味ではありません。映像として記録できた月数のことです。以下、同じ）。

赤ちゃんが話す言葉を喃語 babbling と言いますが、その前に泡吹き bubbling があるのが面白い。

**ビデオ 2**：語り手と向き合い、昔話・桃太郎の意味は理解できないにも関わらず約 6 分間にわたって聴きました。（10 か月）

桃太郎が生まれたときの「おぎゃあ おぎゃあ」や「いっぱいごはんをたべると むくっと おおきくなり」などのリズムカルなオノマトペ（擬態語・擬声語・擬音語・擬情語など）に強く笑い声をあげて反応し、表情・ジェスチャー・声の調子・まなざしを通して「やったりとったり」のコミュニケーションができればはじめます。

**ビデオ 3**：絵本『もこ もこもこ』を読んでもらい、テキストのオノマトペの響きに笑い声を立て、あわせて、たえず読み手の表情を確かめます。絵本の絵を見る→読み手の表情を確かめる→オノマトペへの笑顔の反応が三項関係で循環しつつあらわれています。（5 ヶ月）

発表の折、このビデオを見たイギリスの研究者から、この三項関係こそリテラシー形成のはじまりであるとの的確なコメントがありました。

**ビデオ4**：絵本『もこ もこもこ』を読んでもらい、大はしゃぎ。両手を上下に振り回し大声で笑い、読み手を挑発するかのよう自分の読みを果敢に表現します。（10ヶ月）

リズムカルなオノマトペの絵本を読んでもらい、表情・ジェスチャー・声の調子・まなざしを通して「やったりとったり」しつつ、自らもコミュニケーションの循環でリーダーシップを取ろうとします。

**ビデオ5**：絵本『もこ もこもこ』を一人で読み始めます。自分自身でもジェスチャーで「もこもこ」などの擬音語・擬態語を表現します。（2歳7ヶ月）

**ビデオ6**：絵本『たんたんぼうや』を読んでもらい、じっと探るように絵を見続けます。「たんたんたん」の擬音語にニコッと笑い、描かれた動物をじっと見えています。（10ヶ月）

コミュニケーション型絵本『もこ もこもこ』と認知型絵本『たんたんぼうや』の読み方が、かなり異なっていることがわかります。

## II 文字は読めなくても「読むこと」はできる（映像）

赤ちゃんは、日常的にお話を聞いたり絵本を読み聞かせてもらったりする習慣があると自分でも赤ちゃん語（baby jargon）を使って読み始めます。

**ビデオ7**：『ねずみのでんしゃ』をジャーゴンで巧みによみます。（1歳3ヶ月）

**ビデオ8**：雑誌「論座」を一人でめくりながら朗々と読みます。ページがしっかりと完全に開かれるまで読みません。（1歳5ヶ月）

絵本や大人の本も「読む」が、内容（絵と活字のかたち）をじっと確かめた後、ジャーゴンのメロディやリズムを自分の理解に基づき（と、思われる）変化させます。絵本を読んでもらうことが文化環境として存在することにより「読むという言語行為」が習得されます。

## III 意味の発見と命名への意欲—音声の文節化と単語の習得—（映像）

このような絵本の読み方は、早ければ言葉を習得し始めた1歳過ぎ頃からあらわれはじめます。伝統的な「赤ちゃん絵本」とは、一般的にはこのような読み方を意味していました。

**ビデオ9**：『あかちゃんのずかん1』を読み聞かせてもらいながら、自分でもポインティング（pointing）をしたり、命名（naming）をします。母のジェスチャーを模倣してバナナを食べる振りをしますが、実際に母の指を口に入れてしまいます。（1歳5ヶ月）

単語（音節）の模倣はすぐには出来ないが、おとなによる命名の繰り返しを要求します。初期的な「振り」が出来ることは、象徴機能の発生をあらわしています。繰り返し「アンデー！」（読んで！）と要求します。

## IV シュールレアリスティックなナンセンス絵本の理解（映像）

長新太のユーモアあふれるナンセンス絵本を赤ちゃんが好むのは、リズムカルなオノマトペのテキストに触発されて読み手とタイミングよくやりとり（コミュニケーション）が出来ることが、楽しくて仕方がないからのように見えます。

長新太は、自らの絵本を「シュールレアリスムのナンセンス」とよび、読者が楽しむためには「生理的な参加」が必要だと述べています。

**ビデオ 10：**『ちへいせんのみえるところ』を何度も繰り返し読むことを要求します。母が他の数多くの赤ちゃん絵本を見せても、首を横に振り「いや」の仕草をします。  
(1歳3ヶ月)

**ビデオ 11：**『へんてこライオンがいっぱい』を、何度も読みたいと要求し母が演じる絵本の中のジェスチャーを、断片的に自分でも繰り返し行います。(1歳7ヶ月)

**ビデオ 12：**『ちへいせんのみえるところ』を、認知型絵本のように命名し一人読みします。分からない絵を指さし「コレ？」と母にたずねます。このような読み方は、初期の頃のようなユーモアでダイナミックなものとはかなり異なっています。(2歳7ヶ月)

ビデオ1～4, 7, 8, 10, それに11は、絵本の読みの過程であられる一時的な発達現象を含んでいます。その現象は次にあられる発達を準備し、短期間で消えてしまいます。よく観察していないと、気づかないうちに通り過ぎてしまうことが多いのです。

このような一時的で潜在的な現象は、言語リテラシーの形成と強く結びついているだけでなく、人間関係を結ぶためのリテラシーの基礎でもあると考えています。

諸外国に比べて、とりわけ質量共に豊かな日本語のオノマトペと抽象的な絵やナンセンスが融合した赤ちゃん絵本が、長新太や元永定正らにより創作されたことを世界に誇りたいと思います。また、その幸せを赤ちゃんとともに喜びたいと思います。私は、彼らにより創造された絵本を赤ちゃんと一緒に読むことにより、今までまったく気づかなかった赤ちゃんの新しい能力を見つけることができました。

元永定正の『ちんろろきしし』（福音館書店）の中で谷川俊太郎は、「生命の源」という一文を寄せています。谷川は、「この本は元永定正というひとりの人間のうちに存在する自然から生まれました。ここにある絵も言葉も、自然のもつ形や色や鳴き声や物音と響き合っています。」「その謎めいた形や色や動きや文字の音は意味を持っていませんが、それゆえにこそ楽しく面白く美しい。人間の手がまだ触れていない無垢とでも言うべきもの、大人に毒される前の子どもの感性、この本はそういう生命の源へと私たちを連れて行ってくれます。」と述べています。

#### 絵本文献

『もこ もこもこ』たにかわしゅんたろう／もとながさだまさ／文研出版

『ねずみのでんしゃ』作・山下明生／絵・いわむらかずお／ひさかたチャイルド

『たんたんぼうや』（こどものとも 0. 1. 2）かんざわとしこぶん／やぎゅうげんいちろうえ／福音館書店

『あかちゃんのずかん1（いえのなか）』なかえよしを＋上野紀子／グランママ社

『ちへいせんのみえるところ』長新太／ブリケン出版

『へんてこライオンがいっぱい』長新太／小学館

この研究は科学研究費の助成をうけています。